総合学術研究紀要　第24巻　第１号：25-33（2023）

【研究ノート】

田村俊子研究
－丁景唐書簡をめぐって（１）

Research on Toshiko Tamura : Concerning Ding Jingtang（丁景唐）Letter

キーワード：田村俊子、『女声』、丁景唐、関露、上海学生運動

黒澤　亜里子
Ariko KUROSAWA

はじめに

私が、中国革命の功労者ともいうべき老大家丁景唐[1]に会う機会に恵まれたのは、1992年の8月27日～28日のことである。今思うと、奇跡のような幸運だった。当時、博士論文を準備していた私は、晩年の田村俊子が上海で出していた『女声』という女性向けの中国語総合雑誌の調査のため、上海市在住の丁景唐氏[2]訪ねたのである。

丁先生は、ごくふつうの市井人のような気さくさで私たちを迎え入れて下さった。この場には丁景唐の娘さんの丁言昭女史も同席して下さることになった。丁言昭さんは、関露の評伝『諜海才女』[3]を出版したばかりの新進気鋭の伝記作家である。中国語が話せない私は、通訳として、楊京華さん（当時沖縄国際大学国文学科に在籍、後に琉球大学の中国語講師）に同行してもらい、中国語を習いはじめたばかりの仲西涼子さん（留学希望、同大学短大部在学中）も同席していた。完璧とは言い難いでこぼこの調査チームだったが、全員が意気軒高、熱意だけは誰にも負けなかった。

中国式の茶道具で淹れた美味しいお茶をいただきながら、緊張の中にも楽しく充実した時間は過ぎていった。長時間にわたる私の質問に、丁先生は一つ一つ丁寧に答えてくれ、丁言昭さんも、時折、適切なコメントや補足説明を挟んでくださった。この時の2編の録音テープは、今でも私の一生の宝物である[4]。

帰国後も丁先生との研究交流は続いた。丁先生は、私の質問に応じるかたちで、全部で便せん54頁の研究ノート（回億「私と『女声』」）を4回にわたり、黒澤宛に送って下さった。丁先生の手書きの文字がびっしりと書き込まれた書簡は、論文数本分の内容と分量があり、独特の熱意が感じられるものだった。さらに、1994年の年末にも、丁先生は、江上幸子教授（現フェリス女学院大学名誉教授）を介して黒澤宛に参考資料を届けて下さった（1995年2月3日落掌）。

これらの資料を得て、当日の限られた時間の中で聞き尽くせなかった疑問の多くが明らかになった。日本占領下の上海で、日本人田村俊子とその右腕として編集に携わった中国共産党の地下工作者関露、という日中二人の作家・詩人が発行した『女声』という雑誌の特殊な性格が、丁景唐という実際の投稿者の目を通すことで、しだいにはっきりした手触りと輪郭をもち始めたのである。

しかし、以上の見通しがありながら、1993年に提出した博論[5]にはこれらの成果を充分に反映させることができなかった[6]。また、2012年には田村俊子全集（ゆまに書房）の刊行が始まり、私も編者として加わることになったが、編集作業がなかなか進まないまま、2017年12月11日に丁景唐先生が97歳で逝去された。全集の完結が間に合わず、生前の先生のご厚意と学恩に応えることができなかったことは、研究者として慚愧にたえない。

私自身の研究人生にもあまり残り時間がなくなった。丁景唐ノートは、『女声』に投稿した当事者による貴重な証言資料である。後続の研究者のためにも、不完全ながら拙訳を付して順次紹介していきたい。

◇丁景唐ノートの概容は以下の通り。便宜的に番号（①～⑤）を付す。

第１信（1992年11月27日付書簡）

① 時代背景と歴史的使命

—私と『女声』。日本の友人のために作る。（その１）　4頁

② 私が『女声』に発表した文章の目録（1）

—私と『女声』。日本の友人のために作る。（その２）　6頁

第２信（1992年11月30日付書簡）

③ 私が『女声』に発表した文章の目録（2）　2頁

第３信（1992年12月25日付書簡）

④ 青春の旅

—私と『女声』。日本の友人のために作る。（その３）　37頁

第４信（1993年１月３日付書簡）

⑤『女声』に投稿した革命青年・友人たちの文章目録

—私と『女声』。日本の友人のために作る。（その４）　5頁

１．丁景唐ノート／第１信（1992年11月27日）①

時代背景和歴史的使命

憶我為《女声》写稿之一。為日本友人答問而作。

丁景唐

日本著名女作家佐藤俊子（佐藤露英，田村俊子。在華時改名左俊蘭）和中国著名女詩人関露合編的《女声》(1942年5月15日創刊，出在1945年7月15日第二巻第二期，毎巻12期，共出了38期。

1942年～ 1945年8月，在中国歴史上的上海是1941年12月8日太平洋戦争開始到1945年8月日

本宣布投降的淪陥時期。日本軍国主義発動的戦争対中国人民和對日本人民都是一場大災難。日本軍国主義与中国人民（上海人民）之都是侵略者和被奴役者之間的不可調和的敵我対立面，日本人民和中国人民（上海人民）之間都是深受日本軍国主義者残酷圧迫，深沈禍害的受難者，是同受災難的朋友。当然対於中国人民（上海人民）来説，対日本侵略者更有着強烈的民族仇恨和反抗，這也是作為中国人民的朋友 ——日本人民能够理解的。

佐藤俊子（左俊蘭）女士和関露女士就是在這一特殊歴史背景下，她們建立真誠的友誼，共同編辦《女声》，為我們這些当時文学青年提供了写作的園地。

1941年12月8日～1945年8月15日被日本軍国主義侵略軍直接占領下的上海淪陥区，処於日軍和汪偽政権統治下，抗日的進步報刊書店都停閉了。許多抗日進步的作家，文化人大批分散去了抗日根拠地和大后方，以至海外。留在上海的有名望的作家文化人都隠居起来，不再為報刊写稿，過着極不自由和清苦的生活，有的還被日本軍方逮捕，受到厳刑拷打，如魯迅夫人許広平，老作家夏丏尊，茅盾的妻弟作家孔零境，翻訳家馮寶符，文化生活出版社編輯，散文家陸蠡等々（従略）

我出生於1920年，1938年參加革命，開始編輯《密蜂》文芸刊物。1939年夏，在上海青年会中学（Y.M.C.A. Middle School）卒業后，考入上海東呉大学（Sochow University，原在蘇州，抗戦后遷入上海）従事愛国的学生運動，編輯《東呉団契》刊物。 1940 ～ 1941年編輯和主編“上海基督教学生団体聯合会”会刊《聯声》写了許多詩、散文、雑文、編輯和論文。那時，別的朋友們編輯《中学生活》，《海沫》（以大学生為読者対象）。1941年12月8日，太平洋戦争爆発，日軍進入租界、我們這些学生刊物和許多抗日進步報刊都停止出版。

1942年初，我転到上海滬江大学（Shanghai University）中国文学系三年級読書，転校選読中国文学史，中国古典詩（宋朝大詩人陸遊［陸放翁］的論集《劍南詩鈔》），中国戯曲（明末清初劇作家孔尚任《桃花扇》）等過程。我的老師朱維之教授（著者《中国文芸思潮史》，《李卓吾評伝》，《基督教与文学》等），黄云眉教授（著名的明史研究専家。八十年代在中華書局出版20巻的《明史辨》）都是很有学問的専家。1943年秋，因滬江大学停辦中国文学系，我又転入上海光華大学（1925年従聖約翰大学分離出来）読四年級，1944年春己修完大学四年過程，但等到1944年夏才与同届卒業生拿到大学文憑。我自1938年以后，起初在中学和大学搞地下的学生工作，1940年冬離開東呉大学后，就不再在大学内部做学生工作，而在校外負責宣伝工作（辨刊物和領導学生刊物等）。

1942年～ 1944年是我閲読中国古典文学，誌詞字最集中的時期，同時，我又充分利用上海工部局図書館（就是上海市的市図書館）和私人辦的私営鴻英図書館的有利条件，一邊読書，一邊找我需要的文史材料，作為写作的資料。

所以我1942 ～ 1945年上半年在《女声》上写的文章，基本上可分成両大類。一類為詩，散文，雑文，小説的創作，另一類為大量運用中国古典文学，詩詞和民歌的材料，写反対封建社会，反対封建思想対婦女的圧迫和毒害，如《詩経》民歌中的反映的婦女生活，恋愛，婚姻》，《出妻史話》，《陸放翁出妻事跡考》（写陸遊的恋愛悲劇《釵頭風〔釵頭鳳〕》），《朱淑貞与（元夕詞）》，《詩人秋瑾》，《従（女

子二十四孝子）談起》等。這和我1939 ～ 1941年間写的文章有不同的題材。没有中国古典文学的修養，是写不出這些文章的。但另一方面，運用古典文学，詩詞為題材内容也是為了適応於淪陥時期的不自由政治環境，有借古喩今的作用。我1940 ～ 1941年，編《聯声》時，會運用一些基督教《聖経》的故事和比喩。

我和我的一些青年伙伴們都是受過多年厳格的政治思想教育的革命青年，有一定的従事地下工作和宣伝工作（写作）的経験。当太平洋戦争発生后、我們自己不能辨刊物，就以向公開出版的報刊行投稿的辦法，来曲折地反映現実，反対不合理的社会現状和婦女圧迫，暗示社会的不平等，啓示追求公明的前途。在這種特殊歴史背景下，我們写作時就不能不考慮写作的内容和写作的手法、技巧，既要保護自己不被乱人察覚你是一個革命青年，你有馬克思主義和抗日的思想，又要反映現実，表達一些有積極意義的思想，対読者有益。

我們考察了当年社会上出的刊物，赤裸々宣伝大東亜理論的政治刊物和報刊不能投稿，由某些人包辦（覇住）的一般刊物投稿很難被刊用，（我們也曾向一些刊物投稿，都未能打入包辦圏），我們観察《女声》能用外稿，就要我們的一位女青年鐘恕（她很能写，編《海沫》時，她写過不少文章、還写過長篇小説以大学生活為題材的《蜜斯脱羅貴福》，讓她用“微泙”的筆名写了一篇《青色的恋――一位女学生底手記》寄《女声》，不久果然在1942年10月15日《女声》第1巻第6期上刊物出来。（鐘恕女士，新中国成立后担任中央人民広播電台少年児童部主任和少年報刊負責人。）　於是，我和別的朋友也就分別向《女声》投稿，因為我們都是受過写作訓練的青年作者，文章又〔有〕意義，都被録用（以后詳述），充実了《女声》的内客，也在特殊的歴史条件下、為佐藤俊子女史与開露女史之間的真誠友誼，写下了中日人民之間友誼，中日文化交流的一頁。

我最初向《女声》投稿，是借用了鐘恕女士的“微泙的筆名，写了小説《三男跟一女――一位女学生底手記》，以我在東呉大学，滬江大学学生生活中所接触到的大学生恋愛為題材，故意用了一個女大学生的第一人称的手法，又用了一個女学生的筆名（“微泙”），所以很快就在1942年12月15日《女声》第1巻的第8期上刊登出来。零一篇借用“微泙”筆名写的《寒窓瑣語憶之江》也在1943年1月15日《女声》第1巻第9期刊出。這篇文章的内容是由一位之江大学同学提供資料，由我撰写的。之江大学也是一個教会大学，原来在杭州的銭塘畔六和塔負付近，是風景極美麗的地方，1937年抗日戦争発生后，也搬到上海，与東呉大学，滬江大学，聖約翰大学合称華東基督教聯合大学，同在上海大陸商場（又名慈淑大学〔大楼〕，現在南京路上新華書店后辺的大楼）。我不是之江大学生，因試探《女声》是否採用外稿，就以回憶杭州銭塘江畔美麗的之江大学校園作為“回憶”的題材。 在《女声》第1巻第9期上，同期還刊出了我用我自己的一個新筆名“歌青春”写的詩《棄嬰》，和揚志誠女士以“陸洋”筆名写的《秋潮》（一）獲《女声》長篇小説征文第一名。

至此，我們邁出了“歴史使命”的第一歩。　1992. 11. 26 ～ 28

◇凡例：①丁景唐の手書き原稿は、基本的に簡体字を用いているが、翻刻にあたり便宜上、繁体字に統一した。

②句読点やカギ括弧などの表記は、原文に従った。

③原文と同じ表記ができない場合は、常用の字体を用いた。

④筆者の勘違いや明らかな誤りと思われる語句は、〔　〕をつけて補った。

〔日本語訳〕

時代背景と歴史的使命

―『女声』の為の覚え書き。日本の友人の質問に答えて作る―

丁　景　唐

『女声』は、日本の著名な女性作家佐藤俊子（佐藤露英、田村俊子。中国滞在中は左俊芝と改名）と中国の著名な詩人関露の二人が協力して編集・発行した雑誌である（1942年5月15日創刊、1945年7月15日第二巻第二期、毎巻12期、全38期）。

1942年～1945年8月、特に1941年12月8日から1945年の8月までの時期、つまり、太平洋戦争の開始から日本が降伏するまでは、上海が占領された歴史的な時期である。日本軍国主義によって発動されたこの戦争は中国人民と日本人民にとって大きな災難だった。日本軍国主義と中国人民（上海人民）は侵略者と被占領者であり、調和できない敵対関係にあったが、日本人民と中国人民（上海人民）は、同じく日本軍国主義者の残酷な圧迫、深い禍害の受難者である側面もあり、災難を受けた友人でもあった。もちろん中国人民、特に上海人民には、日本侵略者に対する強烈な民族的仇怨と反抗の感情がある――この点については中国人民の友人である日本人民にはよく理解してもらえると思う。

佐藤俊子（佐俊芝）女士と関露女士は、こうした特殊な歴史的背景の下で結ばれた真誠の友人である。彼女たちの友誼は、『女声』の編集を通じて生まれた。そして、『女声』という雑誌は、私のような当時の文学青年たちに創作発表の機会と場を提供してくれた。

1941年12月8日～1945年8月15日まで、上海は直接に日本軍国主義侵略者に占領、支配されていた。この時期には日本軍と汪政権の統治下で、抗日的な進歩的刊行物を出していた出版社はすべて閉鎖されてしまった。多くの抗日進歩的作家や文化人たちは、大部分が抗日根拠地や大後方に撤退し、上海に残っている有名な作家や文化人のほとんどが隠棲してしまった。彼らは新聞に寄稿することもできず、不自由な苦しい生活を送っていた。作家の中には、日本軍に逮捕され、拷問された者もいた。たとえば魯迅の夫人許広平、老作家夏丏尊、茅盾の妻の弟の作家孔零境、翻訳家馮寳符（ひょうびんふ）、文化生活出版編集長、散文家陸蠡等々（以下省略）

私は1920年に生まれ、1938年に革命に参加した。初めに『蜜蜂』という文芸刊物を編集発行した。

1939年夏に、上海青年会中学（Y・M・C・A Middle School）を卒業後、上海東呉大学（Sochow University　現蘇州、抗戦後上海に移転）に入学した。大学では愛国的な学生運動に参加して、『東呉団契』という刊行物を編集した。1940年～41年の間に、私は上海基督教学生団体連合会の刊物である『連声』という雑誌の編集長として、多くの詩、散文、雑文、論文を発表した。そのほかに、別の友人によって編集された『中学生活』、『海沫』（大学生が読者対象）などの雑誌にも作品を発表した。1941年12月８日に太平洋戦争が勃発し、日本軍が租界に侵入すると、私たちのような学生刊行物と多くの抗日進歩的な刊物は出版を停止された。

1942年、私は上海滬江大学(Shanghai　University)中国文学部３年生に編入した。主に中国文学史、中国古典詩（宋朝の大詩人陸遊〔陸放翁〕の詩集『剣南詩鈔』、中国戯曲（明末清初の劇作家孔尚任『桃花扇』）等の課程を専攻した。私の先生、朱維教授はとても有名な散文家（『中国文芸思潮史』、『李卓吾評伝』、『基督教と文学』等の著者）であり、もう一人は学術研究者の黄云眉教授（著名な明史研究者。80年代の中華書局出版２０巻の『明史弁』）だった。1943年秋、滬江大学中国文学部の講義が中止されたので、私は上海光華大学（1925年聖約翰大学から分離した）の４年生に編入し、1944年春までに全ての講義を修了、1944年夏に卒業生として証書をもらった。1938年以後、私は中学と大学で地下の学生運動に参加した。1940年冬には東呉大学を離れて大学内部の学生工作を一時中止し、学外の宣伝工作を行った（出版物や学生刊物の指導等）。

1942年から44年にかけては、私が多くの中国古典文学、詩詞を集中的に勉強した時期である。この時、私は上海工部局の図書館（上海市図書館）と私営鴻英図書館の有利な条件を充分に活用して読書する傍ら、自分に必要な文学・歴史の材料を収集し、創作のための資料を準備した。

私が、1942年から1945年の上半期にかけて『女声』に発表した文章は、だいたい二つの種類に分けることができる。一つは、詩、散文、雑文、小説などの創作である。もう一つは、中国の古典文学、詩と民謡を大量に運用して、婦女を圧迫し、毒害をなす封建社会と封建思想に反対する以下のような作品、すなわち、『「詩経」民歌中反映的婦女生活· 恋愛· 婚姻』、『出妻史話』、『陸放翁出妻事跡考』、『朱淑貞与（元夕詞）』、『詩人秋瑾』、『従（女子二十四孝子）談起』等である。これらの作品は、1939～1941年にかけて私が書いた文章の題材とは異なっている。たしかに、中国古典文学の知識がなければ、これらの作品を書くことはできなかっただろう。しかし、もう一つの角度から考えると、古典文学、詩詞を題材として書いたこれらの文章は、占領当時の不自由な政治環境に適応するためのものでもある。つまり、故事を用いて現在を喩えるのである。私は、1940年から1941年にかけて『連声』という雑誌の編集をしていたときにも、キリスト教の聖書の故事と比喩を用いて文章を書いたことがある。

私と同志たちのほとんどは、厳しい政治思想の教育を受けた革命的な青年であり、地下工作と宣伝工作（創作）の経験をもっている。太平洋戦争が勃発した後、私たちは独自の出版物を発行すること

ができなくなり、当時の公開出版物に投稿するという方法を用いて、側面から社会の不合理な現状と女性の圧迫に反対し、社会的な不平等を暗示することを通じて公明な前途を啓示し、追求した。この特殊な歴史背景のもとに、我々はやむを得ず作品の内容と手法、技巧などを考慮しなければならなかった。すなわち、マルクス主義や抗日思想をもつ革命青年であることを知られないよう自分を守ると同時に、当時の現実を反映し、読者にとって積極的な意義をもつ有益な思想を伝えることである。

私たちはその時、当時の社会で発行した刊物を調べて、明らかに大東亜理論を宣伝する政治刊物には投稿しなかった。また、私たちが向こうに原稿を送っても採用してもらえなかった。その時、私たちは『女声』という雑誌が外部からの投稿を採用することを発見した。私たちは鐘恕という若い青年女性に頼んで原稿を送ってみた。微泙（ウェイピン）というペンネームで彼女が投稿した原稿は、「青色的恋―一位女子学生底手記」という題名で1942年10月15日の『女声』第1巻第6期に掲載された。彼女は『海沫』という雑誌にもたくさんの文章を発表したり、大学生活を題材にした「密斯脱羅貴福」という長編小説を発表した。

（鐘恕女士は、新中国成立後に中央人民放送局の少年児童部主任と少年報の編集責任者となる）彼女の原稿が採用された後、私と他の友人たちはそれぞれ『女声』に原稿を送った。私たちは散文の訓練を受けた青年作者であったため、多くの作品を書いた。（これらの文章の意義と目録については後述する）これらの文章は『女声』の内容を充実させ、特殊な歴史の条件のもとに、佐藤俊子女史と関露女史の間の真誠の友誼と中日の人民の間の友誼のため、中日文化交流の新しい一頁を開いた。

私が、最初に『女声』に原稿を送ったのは、（同じく）鐘恕女史の微泙というペンネームを用いた「三男跟一女　一位女学生底手記」という作品である。内容は、私が東呉大学滬江大学の学生生活の中で触れた大学生の恋愛生活を題材とし、文章の中に「私」という女子学生の一人称の手法を用いて、女学生の筆名「微泙」を用いて書いたものである。この原稿を送ると、すぐに1942年12月15日の『女声』第1巻第8期に採用された。もう一つの作品はやはり微泙という女学生のペンネームを用いて書いた「寒窓瑣語憶之江」（1943年1月15日『女声』第1巻第9期刊）である。この文章は、ある大学の同窓生が提供した資料を用いて私が書いたものである。滬江大学はもとは基督教大学で、杭州の銭塘江のほとりの六和塔近くのとても美しい景色のところにあった。1937年に抗日戦争が勃発した後は、この大学は上海に移転し、東呉大学、滬江大学、聖約翰大学、華東の基督教連合大学と合併した。現在の上海の大陸商場（慈淑大学、南京路上の新華書店の大楼）の近くにある。

当時、滬江大学の学生だった私は、『女声』が外からの原稿を採用するかどうかを試したかったので、この文章には、杭州の銭塘江のほとりの美しい滬江大学の風景を題材として「回億」の題材を用いた（この文章は『女声』第1期大9期に発表した）。この号には、歌青春のペンネームで書いた私の「棄嬰」という作品も掲載されている。この他に、「陸洋」のペンネームで楊志誠女士と一緒に書いた「秋潮」も掲載されている。「秋潮」は『女声』の長編小説の一等賞をとった。

以上のようにして、私たちは「歴史使命」の第一歩を記した。

1992年11月26日～28日

◇丁景唐ノートの翻訳については、王有紅、王冉さんに多くをご教示いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

（2022年8月31日 脱稿）

【注】

1 丁景唐（1920－2017）は、中華人民共和国の著名な詩人、作家、文学研究者、出版人。1938年、18歳の時に中国共産党に入党、1942年から1945年にかけての日本軍占領下の上海で抗日運動の学生リーダーとして活躍。新中国成立後は党の文化関係の要職を歴任。上海市委宣伝部文芸部長、同広報部長、報道・出版局長、上海市出版局福副局長などを務めたほか、党組書記、上海編集学会名誉会長、第2、第3、第4回全国文化会議代表、中国魯迅研究会の理事および顧問理事、中国出版労働者協会理事、上海出版社協会副会長、上海市編集学会名誉顧問など。魯迅、瞿秋白らの研究や「左連五烈士」（胡也頻・柔石・馮鏗・殷夫・李偉森）の研究者としても著名。1995年、中国作家協会賞、日中戦争旧作家記念賞ほか。『中国新文学大系一九一七～一九三七』全20巻を編集刊行。2017年12月11日逝去。享年97歳。

2 平成4年度沖縄県人材育成財団国外研究員制度による派遣。

3 丁言昭『諜海才女』北方婦女児童出版社、1989年。

4 丁景唐先生と丁言昭女士の紹介により、後日、関露の妹の胡秀楓、李剣華夫妻、当時の田村俊子を知る大平出版公司の編集者楊豊女士にもお会いすることができた。

5 黒澤亜里子「田村俊子と上海―華字女性雑誌『女声』を中心に」（1993年度法政大学博士学位論文「田村俊子研究―〈両性の相剋〉という主題をめぐって」第3部第4章および「付録2 丁景唐メモ」抜粋）。

6 黒澤亜里子「『女声』とその周辺―日中十五年戦争下の文学の比較・交流研究―」（『国内・国外派遣研究員研究報告書』第4号、沖縄県人材育成財団発行、1995年3月）にその一部を報告した。

【参考文献】

1989年　丁言昭『諜海才女』北方婦女児童出版社

1991年　中共上海市委党資料征集委員会主編『抗日戦争時期上海学生運動史』上海翻訳出版公司

2009年　丁言昭『関露伝』上海文化出版社

2010年　柯興『魂帰京都：関露伝』金城出版社

2020年　丁言昭『丁景唐伝』上海文化出版社

Research on Toshiko Tamura : Concerning Ding Jingtang（丁景唐）Letter

Ariko KUROSAWA

Abstract

This is a translation of a memorandum written by Ding Jingtang, who made many contributions to the women's magazine *Josei* (Women's Voice), launched by Toshiko Tamura in Shanghai shortly before she died in 1945. Guan Lu, who was an intelligence agent of Communist Party, also worked as an editor of the magazine. Ding was a former leader of the Anti-Japanese Student Movement in Shanghai, held important cultural positions in the Communist Party of China, and was also active as a writer. In 1992, when I interviewed Mr. Ding, he gave me this memorandum in a letter.